

Sj

人とクルマのいい関係をめざして

7

2007 JULY

●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736

●編集人：千葉英雄

●年間購読料：1200円(定価1部100円・消費税込)
※郵便振替 口座番号：00170-7-173273
※加入者名：(株)アストクリエティブ
安全運転普及本部係

安全運転普及活動ホームページ <http://www.honda.co.jp/safetyinfo/>

今月の スポット

止まることと、よく
確かめることは、自
分の命を守る大切な
方法です。

(特集より)

CONTENTS

- シリーズ：自転車事故削減に向けて
第1回「小学生の自転車事故をなくすために」……………①
事故防止は“止まって、見る”から
- TRAFFIC ADVICE ……………④
●利根コカ・コーポレーション(株)新入社員安全運転トレーニング/
企業の信頼につながる安全運転のトレーニング
- SAFETY REPO ……………④
●Honda Cars 中央神奈川鎌倉店・安全運転ミニ講習会/
春の全国交通安全運動期間中、お客様の運転の不安を解消する
ための講習会を開催
- 活動短信/交通安全センター6月
- OPINION ……………⑤
●大山光春/子どもの交通事故統計を新たな切り口で分析
- VOICE ……………⑤
- DOCUMENT EYE (200) ……………⑥
●朝の通勤時間帯に信号機のない横断歩道で歩行者保護を行う
車両を観察する

シリーズ：自転車事故削減に向けて 第①回「小学生の自転車事故をなくすために」 事故防止は“止まって、見る”から



東京都板橋区立高島第一小学校での自転車安全運転講習会

※1 鈴鹿モビリティ研究会＝鈴鹿市とHondaが、将来のより良い交通環境づくりをともに進めることを目的として1993年に設立され、道路環境の改善や交通安全プログラムの開発、教育の実施などを行っている。

※2 あやとりい＝鈴鹿モビリティ研究会が開発した交通安全教育プログラム。小学3・4年生向けの「あやとりい」、小学生向けの「あやとりい 子ども自転車トレーニングマニュアル」、幼児向けの「あやとりい ひよこ編」、高齢の歩行者・自転車利用者向け「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく としあかしりかいして いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。

<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatori/>



2006年の自転車乗用中の交通事故は約17万件と交通事故全体の約2割を占め、増加傾向にある。一方、道路交通法の改正により13歳未満の子どもが乗る自転車の歩道通行が規定されるなど、自転車に関わる法整備も進んでいる。本紙は今年度、自転車利用者の事故を削減するための交通安全教育を取り上げる「シリーズ：自転車事故削減に向けて」をお送りしていく。第1回目となる今回は、小学生を対象に各地域で展開されている自転車教育の現場取材し、小学生の自転車事故をなくすために、どのようなことを行うべきか、その方向性を探る。



三重県多気郡明和町立大淀小学校での自転車教室



岡山県岡山市立福浜小学校での交通安全教室

★2007年度 シリーズ：自転車事故削減に向けて
今後の掲載予定

第2回 高齢者の自転車事故をなくすために
第3回 歩道での自転車事故をなくすために
※内容は変更する場合があります。掲載号は未定。

2006年の自転車事故の負傷者を年齢層別にみると、16～24歳の若者(21.5%)が最も多く、次いで15歳以下の子どもの(19.7%)と続く。(財)交通事故総合分析センターの資料によると、幼児の自転車事故の約半数、小学校低学年の自転車事故の約3割は自宅から100m以内の場所です。時間帯は午後3～6時が最も多い。また、幼児と小学校低学年の自転車事故の約7割は出会い頭事故が占めている。自転車事故を起した幼児と小学生は、他の年齢層に比べ、「安全不確認」や「一時停止」といった違反の割合が高い。ただし、わざと違反をしているのではなく、幼児や小学生が安全確認の必要性を理解していないためだと考えられる。子どもの事故を防ぐ上では、交差点などを通過する際に止まって、安全確認をする大切さを教えることが重要だと言える。

幼稚園、小学校などでの自転車の交通安全教育に熱心に取り組んでいる団体の一つが(財)三重県交通安全協会だ。指導を担当するのは交通安全協会アドバイザー(以下、アドバイザー)。現在、8名が活動している。アドバイザーは毎年、春に鈴鹿モビリティ研究会のインストラクターによる研修を受け、「あやとりい」による交通安全教育によって蓄積された幼児や小学生への指導方法を学んでいる。同協会総務・安全対策部アドバイザー第一班長の清水孝さんは、「アドバイザーが子どもに話す内容などに、研修で学んだことを活かしています。自転車に関するだけでなく、子どもの前に立つ時の立ち居振る舞いや、子どもとの接し方などが役に立っています」と話す。

5月16日、三重県多気郡明和町立大淀小学校では、全学年を対象にした(財)三重県交通安全協会による自転車教室が開かれた。1・2年生、3・4年生、5・6年生が交代で、全校児童184名が参加した。午前9時55分、1・2年生の児童が校庭に集合する。指導にあたるのは7名のアドバイザー。まず、アドバイザーの吉野真由美さんが道路のイラストを示して、自転車はク

走行する場所を確認する。「自転車はク

安全確認は自分の命を守る大切な方法であることを伝える

児童たちは走り出す前に右後方の安全を確認することを身につけた

車道では左側端を通行し、一時停止場所では停止線の手前で必ず止まらなければいけないことを伝える



ジグザグ走行の課題に取り組む児童

ルマの仲間なので、車道では左側端を走りましょう」。次に、吉野さんはイラストに「止まれ」の標識を貼りつける。「この標識の先はクルマやバイクがたくさん走っているから、ここで一度止まらなければいけません。標識の下にある白い線は「ここで止まってください」という意味です。止まったら、バイクやクルマが近づいていないか、左右をよく確かめましょう」。

次に、自転車の正しい乗車について説明する。「自転車の乗る時は左側から乗ってください。クルマは右後ろから走ってきますから、右側から乗るとクルマとぶつかってしまいかもしれません。乗る前には両手でしっかりとブレーキレバーを握り、右後ろを見ましょう。サドルにまたがったら、左足を地面につけて、右足でペダルをこぎ出してスタートできるようにします。走り出す前には、もう一度右後ろからクルマが来ていないか必ず確認してください」。

実技ではまず、自転車の押し歩きを行う。児童たちは自転車の左側に立ち、スタート地点から校庭に引かれた白線に沿って、10mほど先の「止まれ」の標識がある場所まで自転車を押して歩く。次にその場所から、右手でサドルを支え、スタート地点まで自転車を後退させる。まっすぐに下がること

ができない児童には、「左手でしっかりハンドルを押さえて前輪をまっすぐにしておかないと、曲がってしまいます」と吉野さんらアドバイザーがサポートする。

続いて、児童が自転車の乗車してスタート地点に並ぶ。スタート地点の右横にはクルマが停まっている。「右側はクルマが停まっているので、よく見えます。このような時、クルマの向こう側が見通せる位置までゆっくりと自転車を前に進めて、そこで『右よし、左よし、右よし、前よし、後ろよし』と確認してスタートします」と、アドバイザーが模範を児童に見せた。スタート地点を出発し、「止まれ」の標識のある停止線まで、まっすぐ自転車をこいでいく。「止まれ」の標識が3カ所に設けられ、児童たちは計3回、「右よし、左よし、右よし、前よし、後ろよし」と大きな声を出しながら、左右と前後の安全確認をしてスタートする練習を行う。ゴール地点に着くと、児童は右後方を見てから降車して終了する。

10時30分からは3・4年生、11時20分からは5・6年生が受講。乗降車の仕方、自転車の押し歩き、一時停止場所での安全確認の練習は1・2年生と同じだが、3年生以上はパイロンの間を走行するジグザグ走行の課題が加わる。(財)三重県交通安全協会の清水さんによると、3年生以上になると「止まる」「見る」を繰り返すだけでは単調になるので、ジグザグ走行を入れているという。「少し難しい課題を与えると、児童たちはその課題をクリアしようと一生懸命に取り組めます」。

5・6年生には冒頭で「自転車はクルマの仲間なので、歩いている人がいる時は、いつでも止まれるスピードで走る、または自転車を押して歩くなど工夫してください。最近、自転車が歩いている人にぶつかって、ケガをさせてしまう事故が増えていきますから、歩いている人のことを考えて乗りましょう。」と歩行者保護の意識を伝えました。「いま、練習した止まることと、よく確かめることは、自分の命を守る大切な方法です。周りをしっかり確かめることが、自転車を上手に乗る秘訣です」と、アドバイザーの吉野さんは締めくくった。

この日の教育は、大淀小学校からの要望を受けて、安全確認に重点を置いた内容になっている。清水さんは、教育の内容は、依頼先の要望や場所の広さに合わせて対応しているという。「同じ小学生でも1年生と6年生では理解度に差があるため、学年の違う児童がなるべく一緒にならないようにお願いします。児童を自転車に乗せる場合は、学年である程度グループ分けをして、グループごとに時間を変えてもらえると、各年齢層に合わせた指導がしやすくなります」。

大淀小学校では昨年、(財)三重県交通安全協会に相談して、児童全員に実技指導ができる自転車教室を実現させた。「当校では自転車通学は禁止ですが、ほとんどの児童は放課後に自転車を利用しています。この地域の住宅街は道幅も狭く、見通しの悪い交差点も少なくありません。ですから、児童を実際に自転車に乗せながら指導を行うことが必要だと考えて、昨年からはじめました。実際に身体を動かすことができるということで、児童も熱心に取り組んでいます」と、宇城順一校長は参加体験型の自転車教室に手ごたえを感じている。

自転車運転免許証をもらって笑顔の小学生



小学生の自転車教育に力を入れている自治体が東京都板橋区だ。2003年に日本で初めて自転車安全利用条例を制定、施行した。土木部交通対策課長の丸山弘さんによると、前年に起きた自転車利用者や歩行者の衝突事故が制定のきっかけになったという。「この事故により当時38歳で幼い子どもを持つ母親が亡くなりました。加害者は成人男性でしたが、賠償保険も未加入だったため、遺族には何の補償もありませんでした。この悲惨な事故を受けて、自転車の安全利用を認識してもらうために、板橋区で条例を制定することになりました」。

条例では、区の責務として自転車整備の促進、自転車事故保険への加入勧奨、自転車利用者の責務として安全な利用が確保でき

るように整備・点検に努めることを明文化した。

条例の制定を受けて、板橋区では様々な取り組みを実施しているが、その1つに小学生に対する自転車運転免許証の発行がある。自転車運転免許証の発行は東京都荒川区が全国で最初に始めた事業だが、板橋区では独自の体制を整えていると、交通対策課交通安全グループ交通対策主査の渡辺好人さんは言う。「安全教育は教育基本法に沿った教育の一環と考え、位置づけています。まず、教育委員会と協力し、学校側から自転車安全運転講習会の実施を授業の一環として区に要請するように意識づけを変えました。実施学年はそれぞれ学校の方針により異なりますが、自転車を利用する児童が多くなる3年生以上の学年が対象で、現状では4年生で実施する学校が多いようです。2003年から現在まで講習を受けた3000人を超える小学生に自転車運転免許証を交付しています」。

講習会では、警察署員による交通安全の講義、実技テスト、ペーパーテストを実施し、自転車運転免許証を交付する。また、東京都自転車商協同組合の協力を受け、児童が持ち込んだ自転車の点検も行っている。



「止まれ」の標識での一時停止も、実技テストで評価の対象となっている

講習会ではまず、地元で自転車店を営む松沢重男さんが自転車の点検について説明。「ブレーキは前と後ろがちゃんと大きくかかっています。ライト、ハンドル、反射板もしっかり見よう。タイヤに空気が入っていないと段差でガツンガツンとぶつかると、ガラスとか釘がささりやすくなるから

「自転車の点検では、無償の部分はその場で整備し、有償の部分は整備の必要な箇所を紙に記入して家庭に持ち帰って、各家庭で自転車店等に持ち込んで修理していただくようなシステムを整えています。講習会にはPTAの方々にもご協力いただいています」(渡辺さん)。

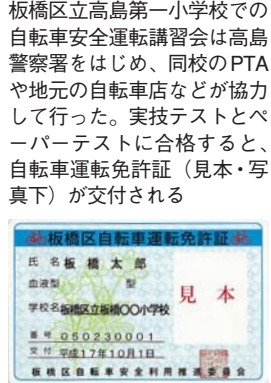
5月22日、板橋区立高島第一小学校で3・4年生を対象にした自転車安全運転講習会が開催された。地元の高島警察署の署員が指導し、土木部交通対策課の職員が立ち会った。同校では、通常3年生が講習を受けるが、今年は昨年の講習会が雨で中止となった4年生も受けることになり、2時限目に3年生、3時限目に4年生が講習を受ける。同校の矢崎良明校長は「2年ぶりに実施できてうれしい」と語る。

講習会をはじめに矢崎校長、続いて、土木部交通対策課長の丸山さんが挨拶し、板橋区内で自転車事故が増えていることなどを話した。

講習会ではまず、地元で自転車店を営む松沢重男さんが自転車の点検について説明。「ブレーキは前と後ろがちゃんと大きくかかっています。ライト、ハンドル、反射板もしっかり見よう。タイヤに空気が入っていないと段差でガツンガツンとぶつかると、ガラスとか釘がささりやすくなるから



実技テストの後、○×形式のペーパーテストを行う児童



板橋区立高島第一小学校での自転車安全運転講習会は高島警察署をはじめ、同校のPTAや地元の自転車店などが協力して行った。実技テストとペーパーテストに合格すると、自転車運転免許証(見本・写真)が交付される

シリーズ:自転車事故削減に向けて 第①回「小学生の自転車事故をなくすために」



クルマの死角をロープを使って示し、この範囲に入らないようにアドバイス

ね。帰ったら、お父さん、お母さんに今日習ったルール、マナーを教えよう」と呼びかけた。次に指導にあたる高島警察署の署員が、自転車は車両、歩道の走り方、二人乗り、雨の日の傘差し、夜間の点灯、一時停止、並走、歩道でのベル使用などペーパーテストの設問に関連した話を、子どもたちに聞かせながら話す。

この後、実技テスト、ペーパーテスト、免許証に貼る顔写真撮影を行う。実技テストのかたわらでは、松沢さんが子どもたちの持ち込んだ自転車を点検し、点検・整備ができていない自転車に安全シールを貼付する。この日は26台中、19台が整備不良。3年生の母親4人が自転車点検カードに1台ごとに不良箇所を記入していく。

実技テストは、スタート→信号機のある横断歩道を降車して渡る→自転車に乗って自転車横断帯を渡る→「止まれ」の標識で一時停止→8の字走行→ジグザグ走行→デコボコ道→ゴールというコースを走る。ペーパーテストは10問の○×形式。後日、答え合わせをしたペーパーテストと、自動車運転免許証と同じサイズで、氏名、学校名、顔写真入りの自転車運転免許証が学校に届けられる。ペーパーテストの結果が良かった子どもには再度先生から補修教養してもらい、自転車運転免許証が交付される。免許証をもらった子どもたちは、「うれし」「やったね」「お父さん、お母さんに見せる」と、みんな笑顔だ。全国・東京都学校安全教育研究会研究部長も務めている矢

崎校長は、「免許証を子どもたちは楽しみにしています。免許証の講習会を通して、安全教育が充実していくといいと思います。今日の講習会では、3・4年生各8名の保護者にご協力いただきました。学校外の安全は家庭と地域でしっかり指導することが大事ですから、保護者が参加されることも意義があると思います」と、講習会に期待する。

走っている時、すぐに止まれる人はいない

10年前から幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校を対象にした交通安全教室を開催しているJAF(社) 日本自動車連盟) 岡山支部が5月29日、岡山県岡山市立福浜小学校で交通安全教室を開催した。参加したのは5・6年生340名。指導にあたるのは、JAF岡山支部推進課事業係副主事の宮本敏彦さんと、推進課事業係長の前田信明さんの2名だ。

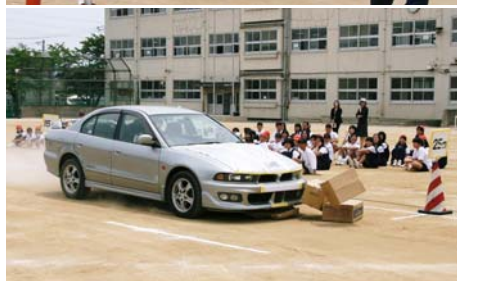
午前10時45分、5年生から交通安全教室が始まる。最初はクルマの死角について。先生にクルマの運転席に座ってもらって、クルマの前に集まった4名の児童が、クルマのまわりで、先生から見えなと思う場所に移動する。フロントバンパーの前に1名、リアバンパーの前に3名がしゃがみ込んだ。運転席の先生からは見えない。今度は、宮本さんと前田さんがロープを使って、運転席の先生が見えない範囲を児童に示す。「みなさんが自転車でクルマの近くを走る時は、この死角の範囲に入らないようにしてください。運転手さんはみなさんのことを必ず見ているとは限りません。運転席から見えない場所は、みなさんが見た時に運転手さんの顔や、ミラーに映った顔が見える場所です。運転手さんの顔が見えない時は、みなさんの存在に気づいていないかもしれません」。

次は、人・自転車・自動車の速度と停止距離。「なぜ、先生が『廊下を走ってはいけない』と言うのか解説します」と宮本さん。校庭に光電管という速度を計測する機器を設置。児童の代表者4名に1人ずつ光電管の前を駆け抜けてもらい、走る速度を測る。5年生では19〜21km/h。参考に走

った先生(男性)の速度は28km/h。自転車の速度は15〜23km/h。さらに、走っている状態で正面に設置された信号が点灯したら急停止するという課題を行う。自分の足で全力疾走している時、急停止するのに平均で約8mかかった。自転車は、後ブレーキだけをかけた時は11m、前後のブレーキを使うと10mだった。

「信号が点灯したのが見えて、止まろうと思うまでもこの時間がかかっています。どんな人でもこの時間はかかります。自転車でも、自分の足で走っている時も、目の前で何か起きてすぐに止まれる人はいません。自転車の場合は、いつでもブレーキをかけられるように準備しておくことが大切です。そして、前後のブレーキを使うことで、短く安全に止まることが出来ます。1cmでも短く止まることは、事故に遭う可能性を少なくしますから、日頃から前後のブレーキをバランスよく使う練習をしておきましょう」。

続いて前田さんが運転するクルマが40km/hで児童の前を通過する。このクルマが止まるのにどのくらいの距離がかかるか、5名の児童に止まると思われる場所にダンボールを置いてもらった。20〜25mの間に4名、30mを超えたところに1名が置いた。再び前田さんがクルマを走らせ、40km/hから急制動を行う。20〜25mの間に置かれたダンボールはクルマに跳ね飛ばされ、児童たちから「わあ」という声があがる。



40km/hで走るクルマが危険に気づいてから、止まるまでにどのくらいの距離がかかるか、児童は考えながらダンボールを置く。止まるために必要な距離は、速度が速くなるほど長くなることを児童に見てもら

「助かったのは1人だけですね」と宮本さん。最後は、ダンボールを使った歩行者の飛び出し事故の再現が行われ、交通安全教室は終了した。

信号点灯による自転車での急停止を体験した児童は、「普段はすぐに止まれると思っていたけれど、急に止まろうとすると、うまく止まれないことがわかった」と感想を話す。「これからは歩行者用の青信号が点滅している時は無理に渡らず、止まろうと思った」という声が児童たちから聞かれた。JAFによる交通安全教室を企画したのは、同校で昨年度の交通安全担当だった白石勲生教諭。「当校は国道2号という幹線道路沿いにあります。そのため、周辺の交通量も多く、大きな事故はないものの、児童とクルマが接触する軽微な事故が起きていました。従来から行っている岡山市による自転車の乗り方指導や、ビデオでの交通安全教育とは異なる形態のものを探していたところ、JAF岡山支部の交通安全教室を知り、お願いしました。インパクトがあって、児童が興味を持って勉強できる内容になっていると思います。今後もこの交通安全教室を継続していく予定です」。

宮本さんによると、交通安全教室では当初から、自転車を使った内容を盛り込んでいたという。「ドライバーを会員としているJAFが自転車利用者教育を行うのは、ドライバーだけでなく自転車利用者にも交

自転車事故削減のために

●Honda自転車シミュレーター

自転車利用者のマナーや危険予測能力を高めることを目的に、Hondaが開発中の体験型教育機器。ハンドル、ブレーキをはじめ、ペダルをこぐことで走行するなど、実際の自転車と同じ運転操作感覚を実現。リアルな映像と音響を使って、混合交通中での走行を体験しながら、左右および後方の安全確認を含む基本動作が学べるようになっていく。添付されたソフトには交通法規を学ぶコースや、危険を体験できるコースを用意。危険体験コースを走行後は、危険な状況に陥るプロセスをさまざまな角度から再生でき、自分の走行を振り返ることができる。現在、効果的な教育方法などを研究中。



●小冊子「トラフィック・サイクル」

～自転車は街を走る仲間～

「トラフィック・サイクル」(監修:岸田孝弥・中京大学教授)はクルマやバイクの運転者向けに自転車との事故を未然に防ぐヒントを掲載した小冊子。自転車利用者の行動特性を理解し、事故防止に役立てていただくための知識やデータ、コラムが盛り込まれている。また、特別付録として「楽しく覚える標識トランプ」が付く。Hondaの四輪販売会社および二輪販売店を通じて、お客様に配布している。

※詳細については <http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/cycle/>

●お問い合わせ先
本田技研工業(株) 安全運転普及本部
TEL: 03-5412-1736

今回の事例にみる小学生に伝えたいポイント

- 自転車は車両、だから車道では左側端を走らなければならない
- ただし、道路交差点の改正により、13歳未満の子どもが乗る自転車の歩道通行が規定された
- 歩行者がいる時は、歩行者保護をしなければならぬ
- 一時停止場所、特に見通しの悪い交差点では、止まって左右の安全確認をしなければならない
- 走っているクルマや自転車は止まるためには距離がかかる
- ドライバーやライダーは必ず自転車の存在に気づいているとは限らない
- 点検整備を行うことで、自分の自転車の状態を知ることができる
- 交通安全について学んだことを、家庭で話してもらおう